

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Gray Scale

C

Y

M

Kodak  
LICENSED PRODUCT



白隱  
禪師

夜船閑話

全

ヤ 9  
893



明治十九年十二月刻成

白隱 禪師 夜船閑話

京都書林 貝葉書院

ヤ 9 893  
門 9 893  
巻



夜船閑話序

窮乏菴主 饑凍選

昭和六年九月十八日 寄  
高田早苗氏 贈

蜜曆丁丑の春長安の書肆松月堂何素とらや  
閑へ遠く草書以裁して昔が鶴林近侍の  
左右不寄せそとく伏して兼は老師乃古紙  
堆中夜船閑話とらや云は草稿あり書中  
多く氣分鍊つと積分養ひ人の管衛として  
充つてゆき長生久視の秘訣を聚む



夜船閑話序

謂ゆは神伝鍊丹の至要ありと是故に卷の  
 好夏の君子を乞とありふ夏荒旱の雲霞見れ  
 る一偶く雲水の徒侶竊かに傳写し來は  
 るも秘重し珍藏して人たしつるせよ  
 天瓢むかしく櫃におさめて匿しつるが如し  
 預くは是は梓に壽がふしていてを獨に感  
 せん固く老師常ふ人と利するなめて老後  
 と樂しむのみと若まんに利ある師豈

に是を吞しみわらんやと二虎會み來て師に室  
 を師微くして後人せよおそ緒子舊書櫃  
 公因け草稿蠹魚の腹中に蘇らる者中祭  
 小ごころ緒子仰ら訂正傳写して既に八十來  
 紙を見たり仰ら封巻していて京師に寄せん  
 とは不が馬齒一日も法子不長とほなひくす  
 端中々書せん夏夏責む不も亦辭せしめて  
 去は云く師鶴林に伝する事大凡四十年鉢

囊は掛けしより以来雲水多まの布衲子纏  
 う小門圃に跨ると師の毒涎を耳かひ痛棒は  
 滋しと志を辞し去る度と忘る者或は十年或は  
 二十年枯林と下の塵とふ事も亦終に顧みざふ  
 底あるま盡く是も最林の頭角四方の精英あり  
 各く西東五六里あるふ分とく舊舎癯完  
 老院破廟借てひく菴居のまくとく清苦と  
 朝艱苦卓盡饑夜凍に承投とる者も菜葉

麦敷耳に觸る者も熱喝垢罵肉骨に徹とる  
 者も噴奉痛棒見ると者顔と攢め同者肌  
 汗と鬼神も汗と涙と汗と汗と瘰癧外も  
 汗と掌は合せ川べり初め来る時六宝玉  
 河晏の義白みそて肌膚光澤凝とる膏乃  
 めくさる者も久しうて恰も杜甫賈嶋  
 の形容枯槁顔色憔悴とるが如く或は居士に  
 澤田小達ふらぬ一参玄軀余は顧る底

の勇猛の上士にわらざるよりんべ何の樂しむ  
 有てり斤時も濼泊とる復を得んや是故不  
 付くに多窮度なること清苦節と失する旅  
 の肺金とみかしくも水分枯渴して疝癖塊  
 痛難治の重症を發せんとは是は憐み是  
 を愁く師と縁の色ある者連日乍ち忍後  
 不禁にして雲頭を按下しを彼女の奥乳を  
 絞つて是に授るふ内觀の秘訣なしては乃ひ

多く若是參禪辨道の工士心火逆上し身心勞  
 疲し五内稠和せざる事ありんに鍼灸藥乃  
 之はなめて是は治せんとかせむ經ひ義陀扁  
 余ときもと輒く救ひ得る事能はし一處に  
 他人還丹の秘訣あり休る事なく穢小是は  
 修せよ奇功を見り復雲霧を指して敵口は  
 見らるめあん若し世秘要を修せんと欲せば  
 且く工を抛下し結頭を拈放し先

須くく熟睡一覺をて一を未と睡りては  
 うと眼を合せざるの如く長く去脚を  
 展べ強く縮むを後一身の元氣をて一て臍  
 輪氣海丹田腰脚足心の乃不充くしめ時  
 に世親をたに成り一亦此の氣海丹田腰脚足  
 心総に是亦が本来の面目と何の鼻孔ある  
 亦此の氣海丹田総に是亦が本分の家郷  
 く何の消息あり亦が世の氣海丹田総不

是亦が唯心の深土と何の莊嚴あり亦が世の  
 氣海丹田総に是亦が己身の弥陀と何の  
 法心の鏡くとお返へしく常に成くのみく  
 妄想をて一妄想の因果つらべ一身の元氣  
 つのり腰脚足心の乃不充定して臍下執  
 持する度いつくし蘇亦ちせざる鞠の如きん  
 恁歴に早くに妄想しおち去て入り七日乃至  
 三三万公經くしむに従前の又狭く聚る

老劣後劣の精症底を拂て平癒せどんは  
 老劣が頭を切ておらまはせし世においそ精子軟存  
 化礼して家々に精修と名く悉くそ見儀  
 の奇功と見了功の遅速は進修は精廉に依は  
 とくども大生皆全快に名く内親の奇功と  
 續嘆志て体中は師の曰く休が輩を病全快  
 とおてひくは是よりととる度かると轉治  
 せは轉く老ぜよ轉く悟くば轉く進め老傷

初め參学の時難治の重病を發してそ憂  
 苦諸子小十倍せり進退難谷はるるを不ひ  
 そくふ思惟とくく生たて此憂愁に沈らん  
 よりんぬらト子く死して世草囊と捨んよは  
 と何の業もや此の内親の秘訣ははくそく  
 全快と傳ふ業今今の精子乃如く至人のそく  
 此は是神伝長生不死の神術より沖下は世  
 来の二百歳あるなりそ餘は針と定むる

らに予則ち歎喜小徳へと精修志くざる者  
 大凡二十年心身以身に健康小氣力以才小勇  
 壯するを覺ふ此において身を保てを小竊  
 く小謂くらく縦ひ世を修ふ修ふ得て彭祖  
 が八百の歳時分保ち得るも唯是一箇福を  
 無智の守屍鬼をくくのと老狸の舊窠小  
 睡るがふ一終小壞滅に歸せん何ぞ故ぞ今既  
 に獨りも葛洪鐵拐張華費張の輩ら小

見れば如く一に弘の大誓を憤起一菩薩の  
 威儀を學びひ乃小大法施を行一虚空小先  
 つて死すべ虚空に後として存ざる底の不  
 退堅固の眞法身小亦殺一金剛不壞乃  
 大仙身を成就せんよと世においてま正參  
 玄の上士ある輩小乃く内親と參禪と共  
 に合を並くべ貯て具の耕一具の斂小も  
 蓋し茲に二十年年々一負と添へ二肩

夜船閑話



と増し得く今既に二百衆に迫りしを中乃  
方来の衲子芳岳疲倦の族く或は心火逆  
上し正に發狂せんとする底を憐み密かに  
外内親の至要を傳授し至所に快癒せし  
め轉々嬉しむ轉々進歩しむ馬年と來吉掃  
に然しつりとし人とも半路の病癒をく齒  
牙全く揺落せし眼耳次牙に分りし  
初もそれや靈慧と忘る毎月あ彦乃法施

終に怠倦せし終に他方に應トて二百又百乃  
海衆と聚會して或は月旬七旬を經不縁に  
雲水の不望ふ終く胡亂乱乃とする大九  
入六十會に及ぶと之も終に一日も罷編  
齋分損とて身は健康を力に次第ふ二三  
十歳の時と遙かに勝るなり是は彼の内  
親の奇功に依る事公費ふ恒菴の諸子各  
く悲泣作禱して之く吾が師大慈大悲願

くは内親の大恩を以て書きて留め給  
 本禪病疲倦を軍の如く者を救へ所吊ら  
 領と云ふまに系行なる移中何の親くまそ  
 曰く大九生んかまとい長まふ保川の要形  
 練るに志るに形を練るの要神氣  
 丹田氣海のる不凝らさしむるにあり神凝る  
 則ハ氣聚るこころ則ハ身ら真丹ある丹集る  
 則ハ形固一形固と則ハ神全一神全と則ハ

まのう一是他人九特還丹の秘訣に契一は須  
 らくあるを一丹の果一して外お小非ざり  
 と子萬唯心火の降下一氣海丹田乃るよ  
 充てしむるふなるこころのそ任菴の緒子此  
 心要の勤めくそげみ進んで息をそん禪  
 病を治し勞疲を救ふのそにあはは禪門向  
 上の度にて年来疑團わむんといふ  
 も公拍して大契さる底の大歡喜者

何が故そ月をうして珠を盡く

惟時審曆 丁丑孟正廿八賞

窮乏菴主飢凍炷香禱首是

夜船閑話

山跡初め冬學の日誓川て勇極の信心を  
 憤發し不退の道情を激起し精錬刻苦  
 とく者既ふふと暮乍ら一夜忽然として  
 落第と徒勞多々の疑惑根より和らぐ氷  
 融し曠劫生死の業根底不徹して區城と  
 自れ頼りて道ち人を去るを定に遠くは  
 古人二三十年は何の程怪そと怖悦踊舞は

忘る者數月向後日用と廻顧とる不初靜の  
 二境全く調和せに去勢乃支逸總下脱洒  
 あらに自謂らく極く精彩を著る重て  
 一回捨命し去ん中執いて牙冥を咬定し  
 雙眼睛と瞳冥し寢食とも不癢せんとも  
 既にして未と期月不直とる不心火逆上し  
 肺金焦枯して雙脚氷若の底不浸とらぬ  
 く支耳漢怒の男不仍くがぬし肝膽不

怯弱し七舉措恐怖多く心神困倦し寐  
 寤種々の境界を見たり支腋不汗を生じ  
 支眼常に涙を常く出さおいて通く明解り  
 投し廣く名醫を探ると云へども百薬す  
 功なし或人曰く城の白河乃山裏に巖居  
 せる者あり在人是を名あて白歯先生と  
 之を靈壽とに甲子を以て一人居に百里  
 程を隔は人と見たり支好尚と行くと別は

夜公問結

三

必<sup>かならず</sup>と<sup>そそり</sup>て<sup>さ</sup>避<sup>さ</sup>く人<sup>ひと</sup>を<sup>けん</sup>賢<sup>けん</sup>愚<sup>ぐ</sup>を<sup>けん</sup>辨<sup>けん</sup>と<sup>る</sup>る<sup>の</sup>の<sup>ち</sup>なり  
 聖<sup>せい</sup>人<sup>じん</sup>専<sup>せん</sup>く<sup>し</sup>祿<sup>りやく</sup>し<sup>て</sup>仙<sup>せん</sup>人<sup>じん</sup>と<sup>り</sup>て<sup>は</sup>く<sup>の</sup>故<sup>こ</sup>の<sup>丈</sup>山<sup>さん</sup>氏<sup>し</sup>  
 の<sup>し</sup>師<sup>し</sup>範<sup>はん</sup>ま<sup>し</sup>て<sup>精</sup>く<sup>大</sup>文<sup>ぶん</sup>に<sup>つ</sup>通<sup>つう</sup>し<sup>て</sup>深<sup>ふか</sup>く<sup>醫</sup>道<sup>いどう</sup>  
 不<sup>ふ</sup>達<sup>たつ</sup>と<sup>り</sup>人<sup>ひと</sup>あり<sup>終</sup>を<sup>ま</sup>り<sup>て</sup>洛<sup>らく</sup>耶<sup>や</sup>と<sup>り</sup>別<sup>べつ</sup>の<sup>稀</sup>  
 き<sup>に</sup>微<sup>び</sup>言<sup>げん</sup>を<sup>は</sup>く<sup>返</sup>ひ<sup>て</sup>足<sup>あし</sup>を<sup>かん</sup>考<sup>かん</sup>け<sup>よ</sup>大<sup>だい</sup>ひ<sup>に</sup>  
 人<sup>ひと</sup>不<sup>ふ</sup>利<sup>り</sup>あり<sup>と</sup>し<sup>け</sup>小<sup>せう</sup>お<sup>わ</sup>く<sup>き</sup>密<sup>みつ</sup>永<sup>えい</sup>第<sup>だい</sup>七<sup>しち</sup> 庚<sup>こう</sup>寅<sup>いん</sup>  
 孟<sup>もう</sup>正<sup>せい</sup>中<sup>ちゆう</sup>院<sup>いん</sup>竊<sup>せつ</sup>く<sup>小</sup>行<sup>かう</sup>纏<sup>てん</sup>ん<sup>着</sup>け<sup>濃</sup>東<sup>とう</sup>ん<sup>發</sup>  
 思<sup>し</sup>谷<sup>こ</sup>ん<sup>越</sup>へ<sup>直</sup>ち<sup>小</sup>白<sup>はく</sup>川<sup>せん</sup>の<sup>邑</sup>に<sup>到</sup>り<sup>包</sup>と<sup>茶</sup>

店<sup>てん</sup>小<sup>せう</sup>お<sup>わ</sup>く<sup>し</sup>て<sup>幽</sup>く<sup>巖</sup>栖<sup>せ</sup>の<sup>ま</sup>を<sup>る</sup>ぬ<sup>里</sup>人<sup>じん</sup>遙<sup>てう</sup>り  
 に<sup>一</sup>枝<sup>しち</sup>の<sup>溪</sup>水<sup>すい</sup>ん<sup>指</sup>と<sup>仰</sup>ち<sup>彼</sup>の<sup>あ</sup>を<sup>夢</sup>に<sup>ほ</sup>て  
 遙<sup>てう</sup>りに<sup>山</sup>溪<sup>せき</sup>ふ<sup>入</sup>は<sup>正</sup>よ<sup>行</sup>く<sup>夏</sup>夏<sup>あ</sup>を<sup>む</sup>く<sup>よ</sup>ふ<sup>乍</sup>  
 ち<sup>流</sup>ぬ<sup>公</sup>臨<sup>りん</sup>断<sup>たん</sup>と<sup>樵</sup>徑<sup>じょう</sup>も<sup>ゆ</sup>か<sup>か</sup>一<sup>時</sup>一<sup>一</sup>  
 き<sup>交</sup>わり<sup>遙</sup>く<sup>不</sup>雲<sup>うん</sup>煙<sup>えん</sup>の<sup>り</sup>ん<sup>公</sup>指<sup>し</sup>と<sup>昔</sup>白<sup>はく</sup>ふ<sup>く</sup>  
 て<sup>方</sup>寸<sup>すん</sup>餘<sup>よ</sup>を<sup>着</sup>あ<sup>り</sup>と<sup>山</sup>氣<sup>き</sup>に<sup>ほ</sup>て<sup>或</sup>は<sup>終</sup>つ<sup>と</sup>  
 或<sup>ある</sup>は<sup>隠</sup>る<sup>是</sup>幽<sup>ゆう</sup>の<sup>洞</sup>は<sup>不</sup>壅<sup>おう</sup>下<sup>か</sup>と<sup>る</sup>ふ<sup>の</sup>蘆<sup>ろ</sup>簾<sup>せん</sup>  
 さ<sup>り</sup>と<sup>不</sup>仰<sup>おう</sup>ち<sup>裳</sup>と<sup>裳</sup>け<sup>て</sup>上<sup>の</sup>峰<sup>ほう</sup>巖<sup>がん</sup>公<sup>臨</sup>

神皇正統記

み蒙茸を披け氷雪草鞋を咬雲露納  
 衣を履と辛汗を滴苦膏を流して漸く  
 彼の苦老屋の空に到きは風致法絶美にあ  
 後に丁くくろくろくを覺入心魂震ひ忍と肌  
 膚軟栗の且く巖根に倚て教息する  
 者教百少舌あめて衣を振ひ襟を正しく  
 畏はく鞠躬して老子の中をゆるめ朦朧  
 とくして齒目と収めて端中をゆるめ蒼髪

垂て膝に到り朱顔鼎へて棗のぬし大布  
 乃袍を掛け鞭草の席に坐せり窟中後々に  
 方入の初よりして全く資生れ具を一机上  
 只中庸と老子と金剛般若とを置くと予  
 則ち禮と盡して苦ろふ病因を告げ且つ救  
 ひん法を少舌函眼を穿ひて熟く観て徐く  
 とくして告げて曰く象へ是山中坐死の陳人  
 檀栗を拾く食ひ糜麻に付はく睡はけ

亦更に何なり知らんや自ら愧に遠く上人の  
 来々々々骨とる度と予仰ち轉々咨叩し  
 休まぬ時小齒枯れしとて予がもみ扱ふて精  
 しく丸内と窺ひ丸候と察と丸甲長こと半  
 寸慘平しとて頼と攢めて洗おて云く已哉親理  
 度小過と進修芥か失しと終小世の重症か  
 發と美に醫治し難ん者い公の禪病あり  
 若し鍼灸薬のこつ乃おん持んで而して後

に是と救ふんと歎せは扁倉力を注ぐ一華陀  
 頼と攢むるも喜切と見ゆ支能へと今既  
 小親理のる小破らけ勤めて内親の切を積ま  
 どんべ終に起は支能へと是頃の起倒は必  
 らん地に依るの謂さる予が曰く頼くも内  
 親の要秘とせうん學まびつて小足を修せん  
 齒束く必しとて容かあはるに従容く  
 告て曰く嗚呼この必しは同くを好む乃士

たり疾が昔一箇けるをよみて微しく公り  
 告んり是養生の秘訣ふして人の知る事稀  
 せりより疾くごん必に奇功を見久視も又  
 期しは一丈大道分はくく交儀あり陰陽  
 交和して人物け於先夫の元氣中間小黙運  
 して五臟列了経脈行りる衛氣管血互に昇  
 降循環する者晝夜に六九五十度肺金に北  
 赤ふして膈上に浮ひ肝木に牡藏ふして膈

下に沈ぼむ心火の大陽ふして上部に修ひ  
 腎水の大陰にして下部を合む入勝ふ七神あり  
 脾腎各々二神を藏くを呼ひ心肺より出て  
 吸腎肝に入ると呼ぶ脈のゆく度二寸一吸に  
 脈乃行く度二寸晝夜に一萬二千八百の氣  
 息あり脈一身を巡行するは五十次火の輕  
 浮に志ては杯小騰昇を好む水は沈重ふして  
 常ふ下流分務む若人察せば觀照或は希



と失し志念或は度にふる別は心火熾衛し  
 て胷金焦薄と金母苦しむ別は氷子表減  
 とも母子互に疲傷し七五位困倦し六属凌棄  
 以四大増損して各々百一乃病が生以百藥  
 功を立とる支能いど衆醫総にもん東く祿  
 て終小告るやまらに到る蓋し生ん事あふ  
 國がちりらぬし明君聖まの光を分下り  
 ふし暗君庸まの光を分上り終に以上り

怨小をる別は九卿權に誇り百僚窮を恃んで  
 て民の窮困を顧るを交々し抑小菜色多く  
 困窮甚多し賢良潛み竄し民瞋し恨む  
 諸侯離れ叛と衆夫競ひ起つて終小民度を  
 塗炭にし國脈永く断絶とる不到は心  
 下に導く小をる別は九卿位をちり百僚物を  
 勤めて者小民の勞疲を忘るるを農  
 に餘は人の粟わり婦小餘は人の布背く群

後公明結

三

賢者より属し諸侯を服して民肥一國強く  
 今に遠きもの蒸民なく境ひと後との敵國  
 か一國才斗の智をばくばく民戈戦乃  
 名公知くば人身もゆと終至人い常あり  
 を氣分して下に充てしむ心氣下に充はる  
 別七凶内不初く復ふく日邪備と外より  
 窺ふの能はと營衛充ち心神健るるりにち  
 終小薬餌の耳磁分知くば身終に鍼灸の

痛痒と受けど庸流は乃にを奪わして上に  
 恣小と上小恣にとり刺つたすの火右すの金を  
 討して其官縮ゆり病と六親苦るしみ服む  
 是故に漆園曰く真人の息は是と息とるに  
 雖といて一衆人の息は是と息とる小喉を  
 いては許後かなく盡し余下焦に在る別い  
 手息遠く氣上焦に在る別い手息促はる  
 上陽子か曰く人に真一の氣有るを丹田乃中

に降下する則ち一陽は復と若人始陽初復  
 の候は知むむと終せば暖氣は信と  
 ともなり大元生は書人の乃上部は常より  
 陰線よりん復を要し下部は常より  
 らん復を要せよ支經脈の十二は支の十二に  
 配し月の十二に應下時の十二に合と六支變  
 化再周して一歳を全ふとるが如し五陰上  
 小居し一陽下を占む是を地雷復と云ふ

冬至の候より真人の息は是は息とる小陰  
 とてとるの謂り二陽下に位ひし二陰上小居は  
 是を地天泰と云ふ蓋正の候より萬物發生  
 の氣は含んで百卉表化の澤と云く至人元  
 氣をたして下小充と云むるの象人息を得は  
 則ち常滿充美し氣力常壯とる五陰下  
 居し一陽上に止はる是は地剝といふ九月  
 の候より天是は得る則ち林苑色は冬より百

弁荒落と足衆人の息は是を息とる小嘘を  
 以てとるの象人は是を得る則に形容枯槁  
 齒牙揺ら落に所以不延壽書に云く六陽  
 共に盡く則是全陰の人死し易とて須らく  
 知るべし元氣を以て常に下不充しむ是生  
 命を以て樞要とるもの昔に吳契初石臺  
 先生小見ゆ齋戒して鍊丹の術を習ふ先  
 生の云く永く永く元氣真丹の神秘あり上との

器にあらずるよるよるい得く得るるに古く人  
 黄朱子是を以て黄帝に傳へ帝は七齋戒して  
 是を以て大道の外小ま丹とくま丹乃外  
 小大道を以て蓋し五無漏の法あり修むるの六徳を  
 去る五官を去る其徳を忘る則に混沌とる本源  
 の真氣彷彿として目前に充つ是彼乃大白  
 道人の謂ゆは我が大を以て変はるの夫小合  
 する者なり孟軻氏の謂ゆは浩然の氣を以て

ひそいて肺輪氣海丹田の回小藏めて歲月を  
 守秘て是を守一少一去ア是を守く多  
 適不ー去て一朝カち丹竈を掀翻する則は  
 内外中乃ハ絃四維總是一枚の大還丹は時不  
 當く初て自己存ち是天地に生つて生せに  
 考をたほはとく死せざる底の真箇長生久  
 視の大神伝るるるを覺得せん是を真正丹  
 竈功なる底の時節とて豈に風ふ御一霞

小躑ぐる地を縮め水と踏む等の鎖末なる幻妄  
 心にて懐くもの者さるんや大洋を攪ひく酥  
 酪と一厚土を變じて黄金とて茶賢曰く丹  
 は丹田あり液ハ肺液あり肺液を以て丹田あり  
 還一は是故に金液還丹といふ予白く僅ん  
 で命を固い法且く禪觀を施下し努め力  
 めて治する心にて期とせん若くはまの李士文が  
 謂ゆる清降に偏する者にあつたやんか一

夫亦割せば血或ひの滞碍する復なるむら  
 函微くして笑て云く然るに李氏いふや  
 火の性は火炎上より宜しく是故もくむ  
 る水の性は下より宜しく是故もくむ  
 して上より水の上は火の下は是故も  
 交とて交は則の既済とて交らざる則ち  
 未済とて交は生の象不交は死の象あり  
 李家の謂ゆる清降に偏ありと云丹溪は

学入者の弊は救ふんとする者古く相火上を  
 易とて身中の其性むむ亦ある補火の割  
 とるは心より血火に君相の二義あり君  
 火の上に居て精をまこと相火の下を  
 して動ははるる君火は是一心乃まなり  
 相火は宰輔とて益相火亦支股あり謂  
 ゆは腎と肝とより肝は雷に比し腎は龍に  
 比して是故に云く龍をて海底に帰せしむ

必<sup>かなら</sup>と迅<sup>い</sup>發<sup>は</sup>の雷<sup>かみ</sup>かある但<sup>たゞ</sup>一<sup>ひと</sup>雷<sup>かみ</sup>とて澤<sup>く</sup>沖<sup>ちゆう</sup>に  
藏<sup>かく</sup>と志<sup>し</sup>めば必<sup>かなら</sup>に飛<sup>ひ</sup>騰<sup>とん</sup>の龍<sup>りゆう</sup>からん海<sup>うみ</sup>の澤<sup>は</sup>の水<sup>みづ</sup>も  
あつばとさふ交<sup>ま</sup>かす是<sup>こゝ</sup>相<sup>あ</sup>火<sup>か</sup>上<sup>あ</sup>り易<sup>やす</sup>とさふ割<sup>わり</sup>  
とるの終<sup>は</sup>にあつばや又<sup>また</sup>曰<sup>い</sup>く心<sup>しん</sup>勞<sup>らう</sup>煩<sup>はん</sup>とる則<sup>すなは</sup>は  
虚<sup>こゝろ</sup>して心<sup>しん</sup>熱<sup>ねつ</sup>に心<sup>しん</sup>虚<sup>こゝろ</sup>とる則<sup>すなは</sup>は是<sup>こゝ</sup>を補<sup>ぐ</sup>とさふ不<sup>ま</sup>  
心<sup>しん</sup>下<sup>げ</sup>志<sup>し</sup>て以<sup>も</sup>て腎<sup>じん</sup>に交<sup>ま</sup>は是<sup>こゝ</sup>を補<sup>ぐ</sup>とさふ既<sup>すで</sup>  
海<sup>うみ</sup>の道<sup>みち</sup>あり公<sup>こう</sup>先<sup>せん</sup>心<sup>しん</sup>火<sup>か</sup>送<sup>そう</sup>上<sup>じやう</sup>して世<sup>せ</sup>重<sup>ぢゆう</sup>病<sup>びやう</sup>か  
發<sup>は</sup>に若<sup>ごと</sup>し心<sup>しん</sup>下<sup>げ</sup>降<sup>かう</sup>下<sup>げ</sup>せどもんへ縦<sup>た</sup>ひ二<sup>に</sup>界<sup>がい</sup>乃<sup>すなは</sup>

秘密<sup>ひみつ</sup>か行<sup>かう</sup>一<sup>いつ</sup>盡<sup>じん</sup>しつらた起<sup>お</sup>の米<sup>まい</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>且<sup>かつ</sup>又<sup>また</sup>  
赤<sup>せき</sup>ら歌<sup>か</sup>と模<sup>も</sup>道家<sup>たうた</sup>者<sup>しや</sup>流<sup>りゆう</sup>に於<sup>お</sup>とる公<sup>こう</sup>以<sup>も</sup>て大<sup>だい</sup>ひ小<sup>せう</sup>  
釋<sup>しやく</sup>に吳<sup>ご</sup>る者<sup>しや</sup>とさるる是<sup>こゝ</sup>祥<sup>しやう</sup>か<sup>か</sup>他<sup>た</sup>日<sup>にち</sup>亦<sup>また</sup>發<sup>は</sup>せ  
は大<sup>だい</sup>ひ小<sup>せう</sup>笑<sup>せう</sup>は公<sup>こう</sup>の交<sup>ま</sup>有<sup>あ</sup>しむ交<sup>ま</sup>觀<sup>くわん</sup>は公<sup>こう</sup>親<sup>しん</sup>公<sup>こう</sup>  
以<sup>も</sup>て正<sup>せい</sup>觀<sup>くわん</sup>とさるる多<sup>た</sup>親<sup>しん</sup>乃<sup>すなは</sup>老<sup>らう</sup>公<sup>こう</sup>邪<sup>じや</sup>觀<sup>くわん</sup>とさるる向<sup>かう</sup>とさるる  
公<sup>こう</sup>多<sup>た</sup>親<sup>しん</sup>と以<sup>も</sup>て世<sup>せ</sup>重<sup>ぢゆう</sup>症<sup>しやう</sup>公<sup>こう</sup>見<sup>けん</sup>は今<sup>いま</sup>是<sup>こゝ</sup>を救<sup>きう</sup>ふに  
公<sup>こう</sup>親<sup>しん</sup>と以<sup>も</sup>ては公<sup>こう</sup>若<sup>ごと</sup>し心<sup>しん</sup>炎<sup>えん</sup>  
意<sup>い</sup>火<sup>か</sup>と収<sup>さう</sup>めて丹<sup>たん</sup>回<sup>わい</sup>及<sup>かつ</sup>ひ是<sup>こゝ</sup>の房<sup>ぼう</sup>ふおらば胸<sup>きゆう</sup>





おに師一日密室に入て益々精入深回く元  
 子坐禪の時さんが方の掌の上になくがしと  
 是所ら顛師の謂ゆは繫縁止の大畧あり  
 顛師初め世の繫縁内觀の秘訣を教へくそ  
 家兄鎮法が重病を萬死の中に助け救ひと  
 悔み復へ精しくは小止觀の中に説けるまこと  
 白雲和尚曰くおつ孫に心とて腔子の中に  
 充くむ徒公區一衆公領一賓公接一

機に應じ及び小冬普脱七縦八横のるふおわく  
 是公用ひて清くるまふ一老本殊に利益多と  
 変分覺くと定にせふを一是益一素同一  
 みゆは恬澹虚無とまご真氣是に志とく入  
 精神内に守る病何より来しむとい入終  
 に奉つたの者ありむ且つ其内に守るの  
 要元氣とて一身の中に充塞せし充て百  
 六十の骨節八萬四千の毛髮一毫髪むりも

欠<sup>く</sup>缺<sup>けつ</sup>のま<sup>ま</sup>か<sup>か</sup>う<sup>う</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>ん<sup>ん</sup>ま<sup>ま</sup>ん<sup>ん</sup>要<sup>よう</sup>に<sup>に</sup>これ<sup>これ</sup>生<sup>せい</sup>ん<sup>ん</sup>  
 書<sup>しよ</sup>ふ<sup>ふ</sup>至<sup>し</sup>要<sup>よう</sup>う<sup>う</sup>る<sup>る</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>分<sup>ぶん</sup>知<sup>ち</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>彭<sup>やう</sup>祖<sup>そ</sup>白<sup>はく</sup>く<sup>く</sup>和<sup>わ</sup>神<sup>しん</sup>  
 道<sup>どう</sup>守<sup>しゆ</sup>氣<sup>き</sup>の<sup>の</sup>法<sup>ほふ</sup>當<sup>たう</sup>さ<sup>さ</sup>ふ<sup>ふ</sup>深<sup>ふか</sup>く<sup>く</sup>密<sup>みつ</sup>室<sup>しつ</sup>の<sup>の</sup>鎖<sup>さ</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>し<sup>し</sup>牀<sup>じやう</sup>の<sup>の</sup>  
 案<sup>あん</sup>ト<sup>ト</sup>席<sup>せき</sup>の<sup>の</sup>暖<sup>ぬあ</sup>め<sup>め</sup>枕<sup>まくら</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>さ<sup>さ</sup>二<sup>に</sup>す<sup>す</sup>ま<sup>ま</sup>正<sup>せい</sup>身<sup>しん</sup>偃<sup>えん</sup>卧<sup>い</sup>  
 し<sup>し</sup>瞑<sup>めい</sup>目<sup>もく</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>心<sup>しん</sup>氣<sup>き</sup>の<sup>の</sup>胸<sup>けう</sup>膈<sup>かく</sup>の<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>閉<sup>し</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>し<sup>し</sup>鴻<sup>かう</sup>毛<sup>もう</sup>の<sup>の</sup>  
 以<sup>い</sup>て<sup>て</sup>鼻<sup>び</sup>上<sup>じやう</sup>に<sup>に</sup>つ<sup>つ</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>く<sup>く</sup>動<sup>どう</sup>る<sup>る</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>二<sup>に</sup>百<sup>ひやく</sup>息<sup>いき</sup>の<sup>の</sup>行<sup>かう</sup>く<sup>く</sup>  
 耳<sup>みみ</sup>固<sup>こ</sup>ま<sup>ま</sup>ふ<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>目<sup>め</sup>見<sup>み</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>ふ<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>形<sup>かたち</sup>の<sup>の</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>く<sup>く</sup>か<sup>か</sup>は<sup>は</sup>  
 則<sup>すなは</sup>ち<sup>ち</sup>寒<sup>かん</sup>暑<sup>しよ</sup>も<sup>も</sup>侵<sup>しん</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>能<sup>ねい</sup>は<sup>は</sup>に<sup>に</sup>蜂<sup>はち</sup>萬<sup>まん</sup>も<sup>も</sup>毒<sup>どく</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>

年<sup>ねん</sup>能<sup>ねい</sup>は<sup>は</sup>に<sup>に</sup>壽<sup>じゆう</sup>た<sup>た</sup>二<sup>に</sup>百<sup>ひやく</sup>六十<sup>じゅうじゅう</sup>歳<sup>さい</sup>是<sup>し</sup>真<sup>ま</sup>人<sup>じん</sup>に<sup>に</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>と  
 又<sup>また</sup>獲<sup>とく</sup>内<sup>ない</sup>翰<sup>はん</sup>が<sup>が</sup>白<sup>はく</sup>く<sup>く</sup>己<sup>おのれ</sup>に<sup>に</sup>飢<sup>う</sup>へ<sup>へ</sup>て<sup>て</sup>方<sup>かた</sup>に<sup>に</sup>食<sup>く</sup>へ<sup>へ</sup>未<sup>いま</sup>ど<sup>ど</sup>飽<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>  
 し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>先<sup>まづ</sup>止<sup>とど</sup>む<sup>む</sup>散<sup>さん</sup>步<sup>ぽ</sup>逍<sup>せう</sup>遙<sup>やう</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>務<sup>つと</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>腹<sup>はら</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>空<sup>くう</sup>  
 の<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>腹<sup>はら</sup>の<sup>の</sup>空<sup>くう</sup>る<sup>る</sup>時<sup>とき</sup>に<sup>に</sup>當<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>仰<sup>あう</sup>ら<sup>ら</sup>静<sup>じやう</sup>室<sup>しつ</sup>に<sup>に</sup>入<sup>い</sup>  
 り<sup>り</sup>端<sup>たん</sup>坐<sup>ざ</sup>然<sup>ぜん</sup>然<sup>ぜん</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>出<sup>い</sup>入<sup>に</sup>の<sup>の</sup>息<sup>いき</sup>の<sup>の</sup>数<sup>かず</sup>へ<sup>へ</sup>よ<sup>よ</sup>一<sup>いつ</sup>息<sup>いき</sup>の<sup>の</sup>あり  
 か<sup>か</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>入<sup>い</sup>て<sup>て</sup>十<sup>じゅう</sup>ふ<sup>ふ</sup>到<sup>たう</sup>り<sup>り</sup>十<sup>じゅう</sup>より<sup>より</sup>數<sup>かず</sup>へ<sup>へ</sup>て<sup>て</sup>百<sup>ひやく</sup>に<sup>に</sup>至<sup>いた</sup>り<sup>り</sup>百<sup>ひやく</sup>か  
 教<sup>きやう</sup>へ<sup>へ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ら<sup>ら</sup>去<sup>き</sup>て<sup>て</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>至<sup>いた</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>世<sup>よ</sup>身<sup>しん</sup>兀<sup>ぶつ</sup>然<sup>ぜん</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>  
 世<sup>よ</sup>心<sup>しん</sup>寂<sup>じやく</sup>然<sup>ぜん</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup>年<sup>ねん</sup>虛<sup>こ</sup>空<sup>くう</sup>と<sup>と</sup>寫<sup>い</sup>し<sup>し</sup>形<sup>かたち</sup>乃<sup>なり</sup>と<sup>と</sup>中<sup>ちゆう</sup>く

夜船閑詩

廿

ありさるる久く介と一息おのほくく止まり出でに  
入らざらん時其息八萬二千の毛竅の中より雲  
蒸し霧起はらぬく玄始初来れ諸病自ら  
除れ諸障自然に除滅とらるるのを昭悟せん  
譬へ盲人の忽然とて眼を穿くが如き  
此時人に召して路頭を指すと夜は来ひに只  
おとらぬるを夜は省思して爾ち乃元氣を  
長言せん未だ是故にまも目力な養ふ者

は常に瞑し耳根は去る者なるに飽さるる  
なまはる者なる不黙とすと予ら曰く酥を用ふの  
法は七つしひいへりや出ら曰く行者定中四大  
調和せぬ身心ともく勞疲とらるを覺せぬ  
心は起して應さる世相はなまるとして譬へは  
色香清淨の麩糲鴉印の大いこの如く  
者頂上に頭をせんんに其氣味微妙ふり  
遍く頭顱のるるなうはてしなく

下し来くあ肩及び雙臂を乳胸膈乃乃  
 肺肝腸胃脊梁腰骨次第に沾注し將ち  
 去る世時に當て胸中のみ積六氣疝癖塊痛  
 ゆる隨て降下とる半氷の下に注くごとく  
 歴くとして聲あり遍身を周流し雙脚を  
 温渥し足心に至るく足心止む行者再び應  
 ずる此親なる本とて一岐の浸くとして咽下  
 とる亦の條流積のるを湛して暖め蒸はる

懐も春の良醫の種く妙香の菜物を集め足  
 分羹湯して浴盤の中を盛つて湛して蒸が臍  
 輪已下を漬け蒸はるゆ一此親なる本とて  
 唯心所現の故に鼻根下ら希有の香氣を  
 受て身根俄く小妙好の軟觸を受て身心調  
 適するもの二三十歳の時より遙くに勝たり此  
 時小當り積聚を消融し腸胃を調和し覺  
 一に肌膚光澤を生じ若くは勤めく怠るごとん

バ何<sup>いづ</sup>の病<sup>やま</sup>ろ活<sup>い</sup>せざらむ何<sup>いづ</sup>の速<sup>すみ</sup>はぬさるん  
何<sup>いづ</sup>の仙<sup>せん</sup>成<sup>なり</sup>せざら何<sup>いづ</sup>の道<sup>みち</sup>うたせざらるん  
結<sup>むす</sup>の速<sup>すみ</sup>速<sup>すみ</sup>へ行人<sup>ぎやうじん</sup>の進<sup>すす</sup>修<sup>しゆ</sup>乃<sup>すなは</sup>精<sup>せい</sup>廉<sup>れん</sup>に依<sup>よ</sup>らら  
の<sup>と</sup>走<sup>は</sup>姑<sup>こ</sup>の甲<sup>かう</sup>冢<sup>さ</sup>の時<sup>とき</sup>多<sup>おほ</sup>病<sup>びやう</sup>にして何<sup>いづ</sup>の患<sup>うれ</sup>ひに  
十<sup>じふ</sup>倍<sup>ばい</sup>しれ衆<sup>しゆ</sup>醫<sup>い</sup>總<sup>そう</sup>に顧<sup>かへ</sup>みざら小<sup>せう</sup>到<sup>たう</sup>る百<sup>ひやく</sup>端<sup>たん</sup>か  
窮<sup>きゆう</sup>じとくも救<sup>すく</sup>ふるたの術<sup>じゆつ</sup>か<sup>ら</sup>世<sup>よ</sup>におい  
上<sup>かみ</sup>下<sup>した</sup>の神<sup>しん</sup>祇<sup>ぎ</sup>に祈<sup>いの</sup>て天<sup>あま</sup>仙<sup>せん</sup>の冥<sup>めい</sup>助<sup>すけ</sup>か請<sup>こ</sup>ひ願<sup>ねが</sup>ふ  
何<sup>いづ</sup>の存<sup>ぞん</sup>ひそや針<sup>はり</sup>くはも世<sup>よ</sup>の頼<sup>たの</sup>酥<sup>そ</sup>乃<sup>すなは</sup>妙<sup>めう</sup>術<sup>じゆつ</sup>か

傳<sup>でん</sup>受<sup>じゆ</sup>とる夏<sup>なつ</sup>の秋<sup>あき</sup>喜<sup>き</sup>に堪<sup>た</sup>へに綿<sup>わた</sup>くく<sup>く</sup>精<sup>せい</sup>  
修<sup>しゆ</sup>とる<sup>と</sup>期<sup>き</sup>月<sup>げつ</sup>さるるに衆<sup>しゆ</sup>病<sup>びやう</sup>大<sup>おほ</sup>米<sup>まい</sup>消<sup>しょう</sup>除<sup>じゆ</sup>に  
爾<sup>なん</sup>来<sup>らい</sup>身<sup>みん</sup>心<sup>しん</sup>輕<sup>けい</sup>安<sup>あん</sup>する夏<sup>なつ</sup>の秋<sup>あき</sup>覺<sup>かく</sup>ゆるの<sup>と</sup>癡<sup>ち</sup>く<sup>く</sup>元<sup>げん</sup>  
と月<sup>げつ</sup>の大小<sup>たうせう</sup>の紀<sup>き</sup>すの年<sup>ねん</sup>の泪<sup>なみだ</sup>餘<sup>あま</sup>を<sup>と</sup>知<sup>し</sup>るに念<sup>ねん</sup>  
以<sup>もつ</sup>弟<sup>てい</sup>に輕<sup>けい</sup>微<sup>ゐ</sup>にして人<sup>にん</sup>秋<sup>あき</sup>の存<sup>ぞん</sup>ひも<sup>と</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>る</sup>ま<sup>を</sup>  
とら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ま</sup>馬<sup>ま</sup>年<sup>ねん</sup>今<sup>いま</sup>歳<sup>さい</sup>何<sup>いづ</sup>十<sup>じふ</sup>累<sup>らい</sup>あるの<sup>と</sup>も<sup>と</sup>は<sup>ら</sup>ぬ<sup>ま</sup>  
知<sup>し</sup>るに中<sup>ちゆう</sup>の端<sup>たん</sup>中<sup>ちゆう</sup>も若<sup>わ</sup>州<sup>しゆう</sup>の<sup>と</sup>中<sup>ちゆう</sup>に瀆<sup>だつ</sup>道<sup>だう</sup>と<sup>と</sup>  
何<sup>いづ</sup>者<sup>しや</sup>大<sup>おほ</sup>九<sup>く</sup>二十<sup>にじふ</sup>歳<sup>さい</sup>在<sup>あ</sup>人<sup>にん</sup>都<sup>と</sup>て知<sup>し</sup>る<sup>ま</sup>未<sup>ま</sup>か<sup>ら</sup><sup>ず</sup>中<sup>ちゆう</sup>

乃公顧るに此も黄梁半熟の一夢れぬ今  
 此山中人のやまに向く此枯朽の一具骨を放  
 て太布の單衣纏りに二三片を掛け歳冬の寒  
 威綿を折くの夜といふとも枯腸と凍損とを  
 にいさげば山粒とをせに断つて穀氣を受げざ  
 り半動もなきに數月に及ぶといふとも終り  
 凍餓の覺つてもあるまは若此親の力らあふや  
 承今既に公小告るに一生利し盡さず底の

秘訣なめては此外文に何なるやと云て目  
 収めて我中にも亦も満る會んで禮辭に  
 徠くくして洞は公下よ木末纏りに殘陽と  
 掛く時小履を下の丁くくして山谷小谷を  
 わるも且つ驚きと且つ怪んで畏れく回顧すも  
 遙かに齒が巖窟を蹴りて自ら送り来る公  
 見ると仰ち曰く人迹不到の山路西東分ち難  
 一思くは帰客公悩せんを未ださくく飯糧

舟導人<sup>しちひん</sup>と去て大野<sup>おほの</sup>展<sup>ひら</sup>ん着<sup>き</sup>る瘦<sup>しやう</sup>鳩<sup>こ</sup>杖<sup>じやう</sup>とひこ  
 嶮<sup>けん</sup>巖<sup>がん</sup>の躡<sup>のり</sup>と岨<sup>しよ</sup>祖<sup>そ</sup>の階<sup>の</sup>る身<sup>み</sup>才<sup>さい</sup>飄<sup>ひょう</sup>ととて坦<sup>たん</sup>途<sup>と</sup>  
 と行くが妙<sup>めう</sup>く終<sup>しゆう</sup>笑<sup>せう</sup>して先<sup>せん</sup>驅<sup>く</sup>は山路<sup>さんじゆ</sup>遙<sup>えう</sup>かり  
 星<sup>せい</sup>許<sup>こ</sup>が下<sup>した</sup>て彼<sup>か</sup>漢<sup>かん</sup>水<sup>すい</sup>の不到<sup>たうたう</sup>て舟<sup>ふね</sup>ち同<sup>どう</sup>く此<sup>こゝ</sup>の流<sup>なが</sup>水<sup>みづ</sup>  
 に洑<sup>しう</sup>ひり<sup>り</sup>は必<sup>かなら</sup>び白<sup>しろ</sup>川<sup>がは</sup>の尾<sup>び</sup>に到<sup>いた</sup>らむと云<sup>い</sup>て  
 快<sup>かい</sup>終<sup>しゆう</sup>とて別<sup>わか</sup>れ且<sup>かつ</sup>く柴<sup>さい</sup>支<sup>し</sup>して幽<sup>ゆう</sup>り四<sup>し</sup>歩<sup>ぽ</sup>  
 と目<sup>め</sup>送<sup>そう</sup>とるたて老<sup>らう</sup>歩<sup>ふ</sup>の勇<sup>ゆう</sup>壯<sup>さう</sup>なる身<sup>み</sup>才<sup>さい</sup>飄<sup>ひょう</sup>終<sup>しゆう</sup>  
 とて春<sup>はる</sup>の道<sup>みち</sup>とく羽<sup>う</sup>化<sup>け</sup>して登<sup>のぼ</sup>仙<sup>せん</sup>とて人<sup>ひと</sup>

の如<sup>ごと</sup>く且<sup>かつ</sup>つ羨<sup>せん</sup>み且<sup>かつ</sup>教<sup>かう</sup>は自<sup>みづか</sup>恨<sup>み</sup>む春<sup>はる</sup>の終<sup>しゆう</sup>る事<sup>こと</sup>を  
 此<sup>こゝ</sup>等<sup>ら</sup>の人<sup>ひと</sup>に随<sup>したが</sup>うとる変<sup>かは</sup>終<sup>しゆう</sup>はざる事<sup>こと</sup>を除<sup>のぞ</sup>くと  
 して帰<sup>かへ</sup>る事<sup>こと</sup>を時<sup>とき</sup>くに彼<sup>か</sup>の内<sup>うち</sup>親<sup>おや</sup>の瀆<sup>たふ</sup>修<sup>しゆ</sup>とる  
 に終<sup>しゆう</sup>る事<sup>こと</sup>を年<sup>とし</sup>に老<sup>らう</sup>とざる事<sup>こと</sup>を從<sup>したが</sup>う事<sup>こと</sup>の象<sup>しやう</sup>病<sup>びやう</sup>業<sup>ごう</sup>餌<sup>じ</sup>  
 を用<sup>もち</sup>ひに鍼<sup>しん</sup>灸<sup>しゆ</sup>の假<sup>かり</sup>に任<sup>まか</sup>運<sup>ん</sup>に陳<sup>ちん</sup>遠<sup>えん</sup>に特<sup>とく</sup>を  
 病<sup>びやう</sup>を治<sup>ちやう</sup>とるの事<sup>こと</sup>を小<sup>せう</sup>わくは從<sup>したが</sup>う事<sup>こと</sup>の脚<sup>きゃく</sup>を扶<sup>たす</sup>む  
 事<sup>こと</sup>を齒<sup>し</sup>牙<sup>が</sup>の下<sup>した</sup>を事<sup>こと</sup>を事<sup>こと</sup>を底<sup>そこ</sup>乃<sup>すなは</sup>ち難<sup>なん</sup>信<sup>しん</sup>  
 難<sup>なん</sup>透<sup>たう</sup>難<sup>なん</sup>解<sup>かい</sup>難<sup>なん</sup>入<sup>い</sup>底<sup>そこ</sup>の一<sup>ひと</sup>着<sup>き</sup>子<sup>こ</sup>根<sup>ね</sup>に透<sup>たう</sup>るを底<sup>そこ</sup>

に傲して透ゆること七次執喜かゆる者大凡  
六七回を餘の小悟悦踊舞か忘る者數か  
去るに妙喜の謂ゆる大悟十八度小悟數か  
知るは初て知る寔に永か欺らざるものや古  
く二三回の襟を着くこといと足常に  
冰雪の底に没に如くする者今既にこと冬  
嚴寒の日とまきども襟せに極せに馬齒既小  
古稀か越へるといとと拵にぬれたる點の小

病も満ころた度ハ彼の神休の餘動あらん  
きん変かうと鵲林は死の殊喘多しを我  
荒唐の妄終と紀取して以て佗の上流と詭惑  
とと足宿とに靈骨ありて一極に既に感とる  
底の俊流のぬり小設くるにあはに癡純予が  
ゆく骨病予に類いとする底看續して子細小  
觀察せむ必は少くは補ひるらん只忍る別  
人のよか拍して大笑せんまをゆる故を馬枯



其父咬んで午枕に嘔びと〜

明治十九年十二月三日 翻刻御届  
同 年 同 月 廿 二 日 刻 成 發 兌

發行所

貝葉書院

京都市上京區木屋町二條

京都府平民

出版人

菱澤重兵衛

下京區第十四組四條通御旅町  
三十七番戶

